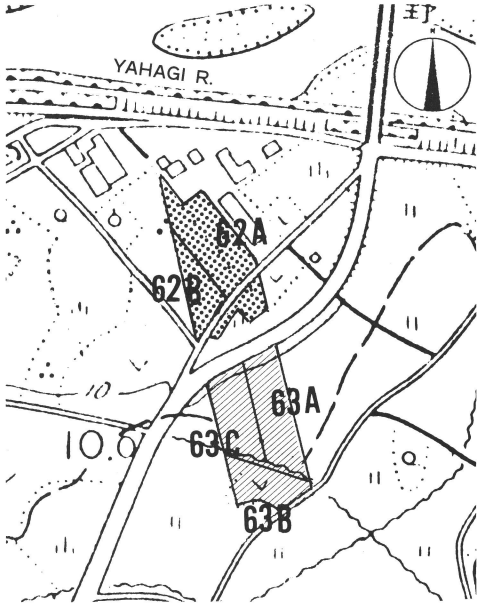
志貴野遺跡

調査の経過

志貴野遺跡は、矢作川（古川）右岸の洪積台地縁辺部に立地している。古墳・平安時代を中心とする集落遺跡で、前年度の調査において多数の竪穴住居と掘立柱建物を検出した。また、同年度の試掘調査の結果、遺跡の範囲は南西に下降する台地末端まで広がることが確認された。

本年度は、現況で旧地形に従って棚田様に耕地が展開する台地縁辺の緩斜面をA～C区に3分割して調査を実施した。以下その成果について記述する。遺構・遺物の時期区分は前年度の「年報」に従い、I期：古墳時代後期、II期：平安時代とする。



第1図　志貴野遺跡調査区位置図（1/5000）

調査の概要

遺構は、標高7.5m以上の平坦面に限って認められた。これは後述する自然地形（開析谷）の制約を受けたものと推定される。

A・C区　A区を中心に竪穴住居・掘立柱建物柱穴・井戸等を検出した。SB01は隅丸方形（4.4×3.3m）を呈し、検出面からの掘り込みは25cmである。床面の周囲には幅20cm程度の周溝を有している。掘立柱建物柱穴は、2ヶ所に集中的な分布が認められたが、前年度調査区に比して密集度は低く、諸条件（埋土・形状・柱通り）を満たす明確な建物は認定し得なかった。SE01は掘り方径1.1m、井筒径84cm、検出面からの深さ2.9mを測る。井筒は基底部に板材を円形に打ち込んだ後、井戸側専用瓦（27×20cm）を積み上げて構築され、現況で7段が確認された。SE01（近世）を除き他の遺構は全てII期に属する。

B区　SB01は1×2間の建物で、内部に方形の掘り込み（1.8×2.8m、深さ10cm）がある。柱穴は不整円形で、径30～40cm、深さ30cmを測る。II期に属する。

開析谷　北東から南西方向に台地端部を緩やかに開析する谷である。底部での比高差はA－B区間50mで1.8mを測り、調査区内での最大幅は約40mである。埋土は概ね3層に分かれ、底部には滞水を示す沈鉄と砂の互層が認められた。また、層序とほぼ対応して上位から、

II期以降→II期→I・II期に位置付けられる多量の遺物が出土した。

まとめ

本年度は志貴野遺跡の外縁部の調査を実施した。遺構は稀薄であったが、自然地形に制約された古代集落の住環境の一端を明確にし得た。遺物は灰釉陶を中心とするII期に質・量共に瞠目に値するものが認められ、当該期に本遺跡の盛期を見出すことができよう。特に円面硯（2）・風字硯、陰刻文緑釉陶等の出土は本遺跡の性格を考える上で注目される。

（福岡晃彦）

第2図　遺構全体図（1/700）